

木屋ケ内—栲原川の川津—

四万十川支流の栲原川沿いの四万十町木屋ケ内は、中ノ島公園など希少植物が多く生育する自然豊かな地域である。集落の起源は古く、縄文早期の磨製石斧などが確認され、早くから集落が所在した地である。中世には、15～16世紀の龍泉青磁碗片などの輸入陶磁器が多く発掘されており¹⁾、物資輸送に関わる川津としての性格も想定される²⁾。ここでは、村の歴史的景観と生活誌を記したい³⁾。



中ノ島公園の碑文



木屋ケ内に自生する山トホゴス

1、『地検帳』に見る村落景観

慶長2年(1597)3月に検地が行われた『長宗我部地検帳』(上山郷地検帳、以下『地検帳』)では、「小や河内村」と枝村の「ふるすく村」(古宿)が現在の大字に該当する。検地された土地面積は4町8反余、屋敷は16軒で、全て「上山分」と記載され、上山氏は所領を没収され長宗我部氏の直轄地になっていると考えられているが⁴⁾、不明な点も多い。『地検帳』記載地名を聞き取りにより現地比定し、戦国末期の村落景観を復元していく。

(1) 集落

16軒ある屋敷地の地名の多くは離れて所在しており、集落は散居的な景観を呈していた。「にせ」の1軒は「ヌセ」、「江くら山」の1軒は「桜山」、「ハセウカ谷」の1軒は「バショガ久保」東側の「ムカイヅケ」集落、「上ヤシキ」「中ヤシキ」の4軒は「川平」集落、「タ

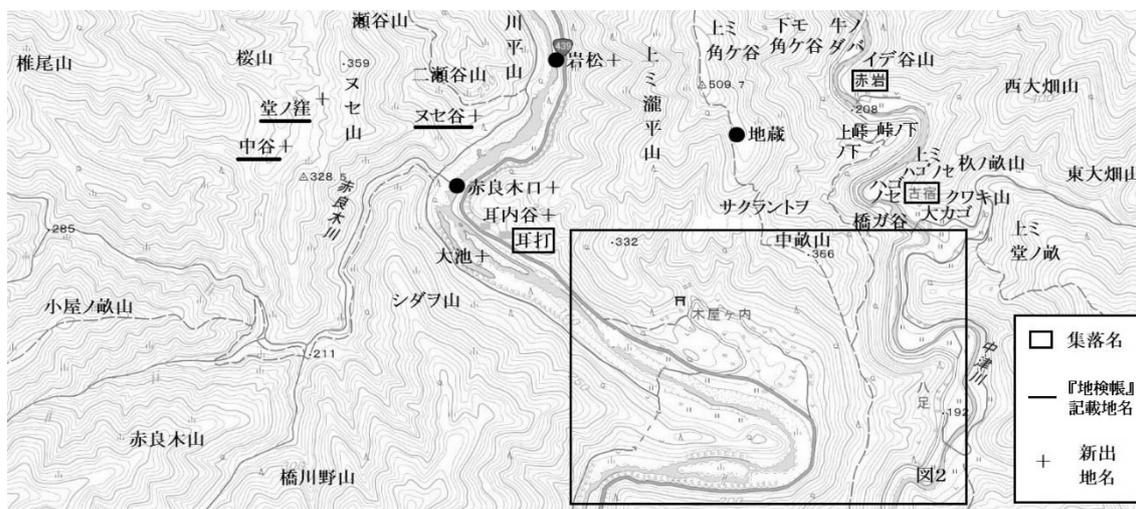


図1 木屋ケ内の地名地図1



図2 木屋ケ内中心部（本村）の地名地図

ノウ岡ノクホ」「名本ヤシキ」の3軒は「下久保」集落、「ふるた」「イツノ谷」の3軒は「上舞」集落に現地比定し、「赤岩」に1軒、「古宿」に2軒である。「庵免」の記載から堂の存在が推測できるが、神社に関する記載は確認できない。

集落中央の本村では、「社谷川」（イツイ谷）の近辺に屋敷がなく、少し高い場所に位置しているようである。これは水量の多い「社谷川」の氾濫を回避するための知恵だったと推測される⁵⁾。なお時期は不明確ながら古代～近世期の柱穴が複数発掘された木屋ケ内遺跡の調査区は「下久保」集落内にあり、谷川から少し離れた場所にある。

(2) 開発・水利

聞き取り調査で多くの『地検帳』記載地名が現地比定できている。「にせ」（ヌセ）「中谷」「堂ノ窪」「ハセウカ谷」など梶原川西側に全て下田だが田地24筆が見られ、ヌセ谷や中谷など水量の豊富な谷水田⁶⁾の開発が進んでいた状況が確認できる。中世に村を治めた名主の直営田とされる「カトタ（門田）」⁷⁾は、「社谷川」の開口部西側にある比較的開けた田である。1代2分～57代と面積の小さい田が6筆連続しており、棚田のようになっている。5筆が上田、1筆が中田、間に1筆4代の切畑が所在し、良田が多い。すぐ近くには名主に隷属した下層農民を指す「名子」に関わる「名子地」のホノギ（中田、34代5分）が記載されており、名の存在を示す中世地名として注目されているが⁸⁾、聞き取りでは地名は確認できなかった。「門田」西側の「上ヤシキ」「中ヤシキ」は屋敷の前に畑（中畠）が伴う「畑ヤシキ」となっており、『地検帳』では確認できないが「門田」には阿弥陀堂（近世の「合正軒（合常軒）」）もあり、ここが「門田」ともに早い時期に開発された屋敷地であろう。

「タノウ岡ノクホ」は社谷川の東側で、田8筆（中1・下6、下々1）、畠12筆（中3、

下8、下々1)、切畑1筆があり、畑地も荒地(5筆)が多く、水掛かりや耕作条件は社谷川西側(川平一田10(上5、中3、下3)、畠9、切畑2)に比べて良くなかったようである。

「ふるた」(古田)「マトハ」(的場)「イツノ谷」(イツイ谷)は、社谷川西側でも高標高の土地。「ふるた」は下畠となっており、当初は谷から出る湧き水で開発された湿田(ジルタ)であった可能性があり、「門田」にさかのぼる初期的な開発地と考えたい。『地検帳』段階では田2筆(下々2)、畠12筆と水田開発は進んでいない。

谷の深い古宿川がある枝村の「フルスク」(古宿)では田10筆、畠3筆と比較的開発が進んでいるが、「赤岩」は田1筆、畠1筆、切畑1筆と小規模な開発となっている。

(3) 土地の耕作と管理

一条氏の傘下にあった上山氏は、一条家滅亡後上山郷の多くの土地を召し上げられたとされる。上山郷地検帳の多くの村々の土地は、給人が記載されず「上山分」と記載される場合が多く、土地支配の実態が不明な点が多い。一方、『地検帳』には屋敷地に「～ゐ」、田畑には「～作」と、居住者・作人が記載されているという特徴がある。

こうした記載に注目し、村を跨いで検証することで、作人の居住や耕作、派遣の実態が明らかになる⁹⁾。作人の分析については、横川末吉氏や広谷喜十郎氏が江戸期の検地帳などとも比較しながら詳細な分析

を行っているが¹⁰⁾、木屋ケ内村について少し詳細に見てみたい。『地検帳』記載の村内の作人をまとめたのが表1である。作人として名前が登場するのは17人で、うち14人が村内の屋敷に居住している。中でも三郎兵衛は田10筆、畠5筆、切畑2筆、扣(管理地)2筆を持つ作人で「名本ヤシキ」に居住している。「名本」の記載がないのが気になりだが¹¹⁾、彼が木屋ケ内村の名本的存在であった可能性が高い。ただし、作人といっても木屋ケ内村以外にも近隣の下津井村で田畑の作人や屋敷の居住者として確認され、比較的遠方の片魚村や小古尾村(現四万十市)などでも作人となっている。その実態は零細な作人というより、人を使って広域の田畑を管理する存在であったと推測され、木屋ケ内村に常に居住していたわけではないだろう。

他にも左衛門二良や又二良、与二良らが下津井や住次郎(現四万十市)などの屋敷に住み・田畑の作職を担っている。同じ作人が同じ村に作職を持つケースは多く、こうした広域的な土地管理のネットワークは今後考察の余地がある。一方で、わずかな土地しか持たない零細な作人が存在していることは作人の経済基盤の差を考える上で重要である。木屋ケ内村内には村の管理とみられる「惣中」が作人となっている田が1筆あり、近隣村でも「惣中作」

表1 『地検帳』記載の木屋ケ内村の作人

作人	耕作地	居屋敷	等級	近隣の耕作地
四良三良	田5畑4	イツノ谷	中	下津井村に田8切畑1ヤシキ1
三良兵衛	田10畑5切畑2扣2	名本ヤシキ	下	
七良	田7畑3	中ヤシキ	中	
左衛門二良	田6畑6	上ヤシキ	中	下津井村に田2畑3ヤシキ1
弥二良	畑1田1	上ヤシキ	中	
左衛門三良	田1			
十良		江くら山	下	
半吉	田1			
二良大良	田4畑2扣2	タノウ岡ノクホ	上	
又二良	田4畑2	上ヤシキ	中	
助三良	田5畑3扣3	堪ヤシキ	中	下津井村に田3畑3ヤシキ1、江師村に扣1ヤシキ1
与大良	畑1			
与吉良(与吉)	田4畑4切畑1	ふるた	下	
兵衛二良	畑1	ハセウカ谷	下	
与二良	畑1	フルスク	下	
与三良(与三)	田3畑1切畑1	赤岩	下	
大良左衛門	畑1	フルスク	下	
惣中	田1			

の田地は多く見られることから、「惣村」的な村の在り方も気になるところである。

(4) 近世の木屋ケ内村¹²⁾

戦国期以降の集落の動向を地誌類や藩政史料から見てみよう。江戸期には、江師・小石・木屋ケ内・下道の4村を支配する江師4ヶ村庄屋が置かれた。木屋ケ内の名本の役宅は「字弓場ヤシキ」で、名本は北村氏が務めた。貞享元年(1684)の「御留山改帳 幡多郡」には、池数17、御留山として「橋川原山」(小松林)、「齒朶尾山」(小松林)、「小崎山」(散林)が記されている。名本は御留山の管理に当たったが、同年の「御材木積帳 幡多郡」には3山について立木の記載はなく、いずれも小木だったようである。

宝永年間(1704~1711年)の『土佐州郡志』では、木屋ケ内(小屋川之内村)の戸数は約25戸。山としては「志朶尾山」「橋川原山」に加え「阿加羅木山(赤良木山)」が記載され「禁私採伐」と記されている。川は「中津川谷 自東至南」とあり赤岩・古宿に流れる中津川を記載している。寺社は、氏神の「川内大明神社」と「合常軒」が記され、後者が『地検帳』の「庵」にあたると推測される。

寛保3年(1743)の『寛保郷帳』では、石高48,547石、21戸、117人(男62人・女55人)、馬12頭、牛1頭、猟銃6挺と記載されている。文化10年(1813)作成の『南路志』には、「地四十八石五斗七合」とあり地高に大きな変化はなし。寺社は「河内大明神 ヤシロ谷 祭礼十一月ノ内」「山王権現 ヲチアイノ上 同 十一月ノ内」「合正軒 カハヒラ退轉 本尊のミ残 本尊 阿弥陀」とあり、阿弥陀堂であり19世紀初期には廃寺となっていることが確認できる。

明治初期の『高知県神社明細帳』(以下『明細帳』)には28戸・188人の記載がある。当時社谷にあった氏神の河内神社(河内大明神から改称)には45間四方の宮林があり、神社社内には古宿から移された日吉神社のほか、琴平神社(嘉永2年勧請・金比羅権現)と鷺神社が祭られている。村内には、他に江戸期の文献に見える山王権現にあたる杉ノ畝の日吉神社、上ミハゴノ瀬に八幡宮もある。『大正町史資料編』によると、戸数・人口はその後、明治24年(1891)には27戸188人、大正2年(1913)には44戸212人、昭和19年には57軒285人と推移する。

2、昭和期の村の姿

(1) 地名

オショウ淵 昔は日照りが長くつぎいて作物が枯死するようなことが度々あって村人が難渋した。雨乞を祈願したところ⁷⁾。川底に釜がある。鮎獲りの場所で最高の淵。ウナギもあってよう捕った。

中山 18世紀初期の『土佐州郡志』は、木屋ケ内村の境界を「東限古畠家林西限津加川南限村中山北限中津川界」と記している。現在は大字内にある「中山」(図1)は村の境界に付けられる地名とされるが、大字・大奈路との境界になっており、現在の大字界とは村境が異なっていたことが分かる。

宮床 ^{ミヤトコ} 昔河内神社があったが、畑が周囲にあって肥が神様にかかるという理由で明治 41 年に現位置の「松葉山」に移転した（『明細帳』）。「宮床」に昔あったという大きな切り株は、宮林の名残だろう。「公会堂」と呼ばれた家が建っていて、広い場所で戦時中、馬に乗った在郷軍人が男女を集めて竹槍訓練が行われた。

堂ノクボ 平たい土地がある場所で、ゼンマイが多く生えていた。

桜山の西 水があちこちに溜まる場所で、ヨセがべったりはえていた。

淵の名前 梶原川の名前が付いている淵は、「岩松」（大きな岩がある）「赤良木口」「ヨコ淵」「カマノハイ」「タキバナ」「宮ノ瀬」「オショウ淵」があった。

屋号 屋号のある家は少ないが、下久保に「シntax」「オモヤ」「ヘヤ」があった。

バショウノクボ 道より下にいくつもバショウが生えていた。

イツイ谷 「ネエ谷」とも呼ばれた。

中ノ島公園 公園の水のたまった所は「^{ふるかわ}古川」と呼ばれ、よくフナ釣りをした場所だった。

（2）集落・宗教

集落 本村は「上舞」「川平」「下久保」で構成され、対岸は「ムカイツケ」、他に「耳打」「赤岩」「古宿」に集落がある。戦後すぐには「古宿」に 8 戸、「赤岩」に 17 戸、「耳打」にも 2 戸があった。『地検帳』に鍛冶屋の記載があるが集落内には鍛冶屋はなく、隣接する「大奈路」に 2 軒（エガマと鎌を製作）、「小石」に 1 軒鍛冶屋があった。また集落内には紙漉きはいなかった。現在集落は「上」（1 班）「下」（2 班）「古宿・赤岩」（3 班）となっている。

小社 『大正町史資料編』によると、氏神の河内神社には三ツ又や槍、鎌などの形をした矛が約 80 本あり、宝暦 5 年（1755）以降諸願成就や家内安全を願って奉納されたという。「赤岩」集落には「上峠下」の山腹に金刀比羅宮があり、棟札に明治 23 年の大洪水で山が崩れ田地や家屋が流出するのを弱めたとして、明治 24 年新たに讃岐国の金刀比羅神社を勧請したと記されている。「上峠下」にある実相八幡宮は『明細帳』の八幡宮であろう。

「庄屋」の墓石 下津井の北村さんの先祖が小屋ケ内の庄屋（名本）で、笠のついた墓。『大正町史資料編』によると、最も古いものは「享保十年」「俗名木屋ケ内庄屋市之進」と記す。

小社など 河内神社の下、シイの木のもとに石の祠があり、木屋ケ内に先祖がいた秋丸の人が祭りよった。観音様が「牧の峠」、山の神は「分ノ鳥山」、山の上から下を眺めて村を守っているとされるお地蔵さんは「サクラントヲ」の北側にある。『大正町史資料編』によると、明治 24 年につくられた「愛宕山地蔵尊」で、集落で毎春に参拝・供養を行っている。若宮様も祭っている。茶堂は 2 つあり、「中屋敷」の茶堂は県道開通後に古い堂と「門田」にあった合常軒が合併されたもの、堂ノ畝の茶堂には地蔵仏があり「安永八」の記載がある。

加賀様 この集落で何軒かが落人を祭っている。「シntax」の家では、加賀様をうちで面倒を見て死んだと伝わる。月の 15 日にずっと米粉でオシラ餅を作って祭る。今は正月だけになっている。祠を作って祭る家も。今は 4 軒。「加賀様」が落人とする伝説については不明であるが、加賀様という名前から慶長 5 年（1600）に上山郷庄屋を務めた上山加賀（「秦氏政事記」『土佐国蠹簡集』）ではないかとも推測される。上山加賀は下津井村を給地として

いたとされる¹³⁾。

施餓鬼 人が亡くなった時、お盆に茶堂で行われる。とうやは茶堂と家に盆棚を作り、盆棚は後に川へ流す。茶堂では一人につき7回念仏を「オミドー（サ）、オミドー（ナ）、エーナ一、モミドー」と唱える。お宮にある太鼓、鉦を使う。念仏のかじをとる人の後について唱える。途中回数が分からなくなるといけなので、コウシバの枝の葉を1枚ずつ折って何回唱えたかを数えた。平成3、4年頃に人がいなくなり施餓鬼はやまったという。

茶屋ゲ 昭和20年くらいまで夏のお盆の頃にやりよった。施餓鬼の後（別日）に、茶堂で接待をする。茶とキビの花を煎って、遍路や通り客にまかないよった。念仏も唱えた。

（3）生業

田畑 「泉ヶ谷」などに何枚か山田があったが、周囲の木が太って作るのをやめた。田では米だけ、畦に作物を植えたりもしなかった。田は少なく、畑がほとんど。カライモ、麦、キビ、大豆、小豆などを作った。山の石垣があると所で切畑、キビ、ソバ。ダイガラ（踏み臼）を使ってソバも打ちよった。

未完成の井出 木屋ケ内は水利が悪い、そこで終戦後から昭和24・25年くらいまで村の事業で、「赤岩」の方から木屋ケ内へトンネルを掘って井出（水路）を作っていた。木屋ケ内から「牧ノ峠」を通して「赤岩」の方へ行き、ダイナマイトで発破をかけて、ツルハシで穴を空ける、中へトロッコを入れて土を運ぶ。中には石をついた。今は掘りやめられているが、まだ穴は空いている。

芋畑 耳打ちの向かいの「シダヲ山」の川縁に「大池」という広い池がある。民間と営林署の山の境になる。終戦前後にその後ろの山の土が良かったから営林署に山を分けてもらい、部落の人が芋を植えて芋畑に。山を焼いてから何年か作った。

タキモン 薪は家の近くの山を切って確保、昭和27・28年頃によく売れた。大奈路の人が買い集めに来ていた。

炭焼 農協が山を買って住民にあてがってやっていた。炭焼山は、「ヌセ」や「赤良木」、「古味野々」（大奈路）などあちこちに、津賀のダムの上の方まであった。「赤良木」には、須崎からも炭焼が来ていた。炭窯は山奥ではなく、道路ふちや木を運んできて水も取れる場所、広い空間があつて赤土のある所を選んで作った。焼いたのはナラ、カシが中心で黒炭。大きな倉庫に炭集めて、リアカーで引っ張ってトロッコで出した。トロッコの線路があった「赤良木」では、線路をはずしてリアカー道をつけて引っ張って出した。焼き上がった炭を監査員が検査して、農協が取りにきていた。検査を通らない炭は二束三文だった。

牛馬 各家で飼っていたのは黒牛。馬も集落に2～3頭いて、田んぼにも使われた。馬はトラック代わりで、材木や炭など何でも運ぶ馬車引きが、大奈路、小石、木屋ケ内にいた。木屋ケ内の人は徳島から馬車引きに来ていて耳打に住んでいた。バクロウは集落にはおらず、馬の種付けをする人は「芳川」にいた。「シャトコ」の跡にチアイバが作られ、囲いにめん（雌）をいれちよって、おんた（雄を芳川から連れてきて種付けしていた）。

家畜 昭和30～40年代前半には、ニワトリを2～3人が飼って農協にも出していた。200

～300頭飼っている家もあった。ヤギも飼っていてミルクをとり、肉も食べた。正月に食べるウサギやニワトリは冬のごちそう。昔は犬を食べる人もいた。

カジ・茶・養蚕 カジは山に自生、植えて世話をしてつくる人もいた。剥いで出して現金収入にした。蒸し場が集落内にあった。茶はたまげるほどの儲けではないが、最初はよかって金にもなった。養蚕も少しやっっていて、蚕を飼って桑の木を集落の上の方に植えた。

松ヤニ 松がたくさんあり、戦後徳島など集落外から人が来て、切り目を入れて松ヤニをとった。仲買がいて一斗缶に詰めて出していた。

草場 畑の後ろに草場があって、それぞれが個人の山で調達していた。「赤良木」にはカヤがあまるばああって、家の畑に入れて肥料にした。

(4) 交通・流通

フナト 1953年に沈下橋が架けられる以前は、引き船が置かれ、両側の部落の行き来をしていた。集落には船を渡す船当番があった。赤良木山の山仕事があったので船は移動に重要、トロッコで運ばれてきた材木も積んだ。沈下橋ができるとトラックが通り材木を運んだ。

牧の峠 マキノトとも。下道の人達は旧矢立街道を通過して峠をこえて大奈路に行っていた。大奈路から尾根沿いに1.5kmくらい登った木屋ケ内分岐となる場所が「牧の峠」で、近くに「およね物語」¹⁴⁾にまつわる二つの墓石がある。

峠の地名 矢立街道には、畝の南側を「サギヤマ」、北側の峠が「サクラントヲ」（タオ）、古宿の集落が見える大きな松がある場所で「ヤスンバ」とも呼んだ。

木材 集落のほとんどの人が杣をやっていた。昭和25年頃架線は少なく、谷へ材木を落として出していた。昭和27・28年頃に架線が入り出した。スラをして木を並べて滑らして、集めてキンマへ積んで川から運んで本道路へ運んで搬出した。材は松、杉、ヒノキ。

川木 カワモクといって昭和30年以前は、川に杉やヒノキがよく流れてきて淵に集まっていた。腐ったやつをはつって道路へ上げて、芯は出して他はパルプにした。タキモクといってタキモンにする人もいた。台風の時には良い小遣い稼ぎ。いいもん（材）が流れてきた。

(5) その他

戦争・南海地震 集落には、軍需用の電力を確保するため昭和14～19年に建設された津賀ダムで仕事をした人もいた。昭和21年の南海地震の時は、家では寝られず畑に雨戸を敷いて寝た。石垣は崩れなかったが、集落の家の庭に地割れがあったり、山で30㍎くらいの段差ができた所もあった。

タキバナの運動会 戦後、秋には部落の人が赤白の2組に分かれて河原の広場（「タキバナ」）で運動会をしていた。昭和26、27年くらいまで。種目はシュロ縄を使った綱引きやかかけっこ。けんかもあったし、そればあ人がおったということ。

出稼ぎ 集落に田んぼは少なく、ほとんどは山仕事に従事していた。こっちで1日300円だった山仕事は広島では1200円、昭和30年以降出稼ぎに出る人が多かった。地元の人が親方をして仕事を受けて県外へ出稼ぎに、行った場所は栃木、長野、岐阜、広島、山口など全国各地。チェーンソーと大鋸の併用、チェーンソーの修理ができると賃が良かった。

エビネラン栽培 「赤良木」にはエビネランが自生していたが、昭和 60 年頃にランのブームで、木屋ケ内でもエビネ栽培が行われた。それ以前は、シイタケやクリ（畑にも植栽）で生計を立てていた。クリが枯れた後にエビネをハウス（小屋）や畑で栽培した。ポット売りで高知市の大丸で毎月展示即売会。名が通って福岡や徳島祖谷から観光バスで買いに来ることもあった。1 年間に 2500 本位作って処理が出来ていた。東京ドームであった世界のラン展などにも出した。栽培は約 10 年、最後は斗賀野の業者（仲買）にランをはかしてもらったという。

（楠瀬慶太）

【註】

- 1) 大正町教育委員会 1995『木屋ケ内遺跡』大正町埋蔵文化財報告書 1。
- 2) 梶原川流域では、隣接する大字・江師に「筏戸」「船戸」などの川津地名が残っている（楠瀬慶太 2020「四万十の地名語彙」『四万十の地名を歩く』）。
- 3) 2019 年 6 月に、松井利満（昭和 13 年生）・範子（昭和 23 年生）夫妻に聞き取り調査を行い、現地踏査を行った成果の報告である。
- 4) 浜田数義「天正検地から慶長検地へ（下）―幡多郡上山郷の場合―」『土佐史談』184 など。
- 5) 旧物部村影仙頭集落の『地検帳』の分析でも同様のことが分かっている（楠瀬慶太 2013「高知県旧物部村の地名に見る山の生活誌」『四国中世史研究』12）。
- 6) 『四万十町頭首工台帳』には下赤岩川、古宿川、中久保川、田ノ畝川、ヤシロノ川、耳打川が水路として登録されている。聞き取りでは上瀧平山の下、「イワマツ」の淵の少し下流東岸にも谷水田があったという。耳打にも水田があるが、これらは『地検帳』で存在が確認できず近世以降に開発されたのであろう。
- 7) 現在も収量の多い田で、水はすぐ下からの谷から取水。昔は谷から溝を掘って水を引いていたという。
- 8) 『地検帳』で「名子地」は近隣の吉川村（芳川）でも確認できる。十和地域では「名子」でなく「田子」という言葉が明治まで使われていたという（『十和村史』）。
- 9) 高知市五台山の吸江庵では、作人は五台山に居住しながら、介良や下田、池などに派遣して耕作を行っていたことが『地検帳』の分析から明らかになっている（楠瀬慶太 2020「中世・吸江庵領の歴史的景観」『高知県立歴史民俗資料館研究紀要』24、『四万十の地名を歩く』に再掲）。
- 10) 横川末吉 1984「十和村の検地と村人」『十和村史』、広谷喜十郎 1984「経済、特に土地関係を中心に見た十和村地域の移り替わり」『十和村史』。
- 11) 例えば、左衛門三良は『地検帳』で大道村（旧十和村）の名本として記載されており、木屋ケ内では「名本」と明確に記載がなく、職掌としての名本は設置されていなかったのだろう。
- 12) HP「四万十町地名辞典」内「木屋ケ内」および『大正町史』の整理を参考に記述した。
- 13) 『大正町史通史編』107 頁。
- 14) 『高知新聞』1960 年 6 月 3 日朝刊では以下のように記される（要約）。「およね」は、明治 38 年頃木屋ケ内にいた美しい娘で、赤良木山にイタドリを取りに行きそのまま帰って来ず、数日後にその山で死体が発見された。通夜で「生きていたら妻にしたかった」と冗談を言った猟師が、およねの墓石につまずいて倒れ、自分の猟銃に当たり死んだ。その後、赤良木山には大へびが出ると伝えられるようになった。